第８章　仲保者キリスト

８．1. 神はご自身の永遠の目的の中で、ご自身の独り子である主イエスを神と人との間の仲保者として選び定め（イザヤ 42:1、Ｉペテロ 1:19,20、ヨハネ 3:16、Ｉテモテ 2:5）、預言者（使徒 3:22）、祭司（ヘブル 5:5,6）、王（詩 2:6、ルカ 1:33）、ご自分の教会の頭また救い主（エペソ 5:23）とし、万物の相続者（ヘブル 1:2）、世界の審判者（使徒 17:31）になることを良しとされました。神は永遠の昔から、一つの国民を彼の子孫として分け与え（ヨハネ 17:6、詩 22:30、イザヤ 53:10）、時至って彼によってその民は贖われ、召命され、義認と聖化と栄化を得るようにされました（Ｉテモテ 2:6、イザヤ 55:4,5、Ｉコリント 1:30）。

１項の前の部分は、父なる神と子との間に、子を仲保者と定めた贖い契約について語っています。つまり、永遠の昔からキリストは、神と人との間の仲保者として選ばれました。キリストは父の御心を受け入れ、私たちのために救いの働きを全うするためにこの地に来られました。贖い契約に対する叙述は、ウェストミンスター総会に参加していた、スコットランド神学者であるサミュエル・ラザフォード（Samuel Rutherford,1600-1661)が強調しましたが、デビッド・ディクソン（David Dickson,1583-1662)は、スコットランド長老教会のためにウェストミンスター信仰告白書付録を作成し説明しました。彼は贖い契約を、神が

ご自身の栄光のために、世の始まる以前、特定数字の人々を選び、彼らをすでに定められていた御子・贖い主に与えたことだと説明しました。贖い契約を支持しながら総会に参加したそれ以外の神学者としては、トーマス・グッドウィン（Thomas Goodwin、1600-1680)、オバディア・セドウィック(Obadiah Sedwick、1600-1658)、エドワード・リー（Edward Leigh、1602-1671)、アンソニー・バージェス(Anthony Burgess)等を挙げることができます。

1 項において、キリストの職務を、預言者、祭司、王として描写しました。預言者としての職務は、ご自分の国民に救いの知識を啓示し与えることであり、祭司の職務は、選ばれた国民のためにご自身の体を犠牲として奉げられ、そして父に、ご自分の国民のために続けて執り成しをしていることです。王の職務として、ご自分の国民をご自身の前に屈服させ、統治し、敵から保護なさいます。キリストを教会の頭、救い主、万物の相続者、世界の審判者として描写しました。

1 項において、神が選んだ民を分け与えられたとは、キリストの贖いの範囲を示すことです。一般贖罪を語っているアルミニウス主義を論駁しています。そして、その子孫になるようになさったことを、重ねて贖い契約を語っていますが、それは贖い契約と選びを否定するアルミニウス主義を論駁することです。更に 1 項において、贖い、召命、義認、聖化、栄化をキリストの仲保者職による有益等々として言及しています。それは、聖霊の有効な御業を強調することですが（10 章を参照）、アルミニウス主義を論駁するための叙述です。なぜなら、アルミニウス主義は聖霊の有効な御業を無視して、聖霊の御業なしに人間の意志でキリストを受け入れられると強調しているからです。そのような主張を反対してウェストミンスター信仰告白書は、聖霊の有効召命があってこそキリストが適用されて、義認、聖化、栄化が可能になると述べたのでした。

８.2. 三位の中で第二位格である神の御子は、真の永遠の神としていまし、御父と一つの本体、また同等でありながら、時満ちて人間の本性と（ヨハネ 1:1,14、Ｉヨハネ 5:20、ピリピ 2:6、ガラテヤ 4:4）人間の本性に属するあらゆる本質的固有性と一般的な弱さも取られ、しかも罪はありません（ヘブル 2:14,16,17,4:15）。彼は聖霊の力により、処女マリヤの胎に身ごもられ、彼女の本質を取られました（ルカ 1:27,31,35、ガラテヤ 4:4）。それで、二つの十全な、そして区別された本性である、神性と人性が転換したり、混合や混同されることもなく、一つの人格の中で分離されることもなく互いに結合されました（ルカ 1:35、コロサイ 2:9、ロマ 9:5、Ｉペテロ 3:18、Ｉテモテ 3:16）。この人格は、真の神また真の人として、しかもなお、一人のキリスト、神と人との間の唯一の仲保者です（ロマ 1:3,4、Ｉテモテ 2:5）。

2 項では、キリストに対する誤りに対して積極的に論駁しています。2 項の始めの部分から、父、子、聖霊の従属説を排除しています。次は、救済史の時間を言及しながら、御子が聖受肉なさった事件を述べていますが、それはキリストが処女の体から誕生する以前は存在したことがないというソッツィーニ主義者を論駁しながら、聖受肉以前は、天使と同じような霊の状態で存在していたと主張するアリウス主義者を論駁しています。またキリストは人性を取られ、神性と結合されていて、互いに異なる二つの本性が一つの人格の中で不可分の関係を結ぶようになったことと叙述されています。この言及は、キリストの中に二つの人格が存在していて、一つは神性、すなわち、永遠の御言葉であり、もう一つは人性に該当される人間イエスだと主張する、ネストリウス派（Nestorianism）に対して論駁していて、キリストの中にただ一つの本性だけが存在すると言いながら、人性が神性に吸収されていると主張するユーティコス派（Eutychianism）が誤りだと明確にしています。そして 2 項の最後の部分で、キリストを唯一の仲保者と言及することで、聖人と御使いもキリストと共に仲

保の働きをすると主張する、ローマカトリックの教えを反対しています。

キリストの神性に対する誤りは、古代教会と宗教改革当時と清教徒時代に限局される話ではありません。キリストの神性に対する誤りは 18，19 世紀まで継続されて来て、20 世紀の自由主義神学もキリストの神性に対しては誤りです。キリストの神性に対する誤りの特徴は、キリストの贖いを反対することだから、自然に道徳的行為の宗教になります。このような誤りは理性主義だから、聖書の啓示を理性的に判断し、人間に便利なものだけを取る傾向が強いのです。従って、人間中心主義になるしかありません。しかし聖書は、聖霊の霊感によって記録されたので、自然的理性をもち理解しようとしても、判断できるものではありません。特に贖いに関する問題は、自然的理性をもって悟ることのできるものでもないので、理性主義者たちはキリストの神性と贖いに対して、霊的に悟ることができないので、結局、誤りに陥ってしまいます。

８.3. 主イエスは、神性と結合された人性を持っていて、聖霊によって聖くあられ、無限に油注ぎを受け（詩 45:7、ヨハネ 3:34）、ご自身の中に知恵と知識との宝がすべてあって（コロサイ 2:3）、御父はすべての満ち足れる徳が彼のうちに宿るのを良しとされました（コロサイ 1:19）。それは、聖く、傷なく、汚れなく、恵みと真に満たされ（ヘブル 7:26、ヨハネ 1:14）、仲保者と保証人の職務を（使徒 10:38、ヘブル 12:24, 7:22）遂行するために完全に整えられるためでした。この職務は、彼が自ら取られたのではなく御父の召命によるのであり（ヘブル 5:4, 5）、御父はすべての権威と審判を彼の手に委ね、それを遂行するように命じられました（ヨハネ 5:22, 27、マタイ 28:18、使徒 2:36）。

3 項の前半では、キリストと聖霊との関係を述べています。キリストの独特性は、聖霊と共になさることにあります（ヨハネ 3:34）。後半では、キリストと御父との関係を説明します。キリストの仲保者の職務を父が委ねたことと言及することで、1 項の始めに説明した贖い契約を再び強調しています。3 項の後半は、父がキリストにすべての権威と審判を彼の手に委ねたことについて語っています。それは、私たちを罪から救い出し贖うためであり、私たちを義と聖さによって神の形に参与するようにさせるためですが、これがない救いは嘘です。道徳律廃棄論主義者は、聖化がなくても救われると主張しますが、清教徒時代において代表的な誤りでした。

８．4. 主イエスはこの職務を快く請け負われ（詩 40:7, 8、ヘブル 10:5－10、ヨハネ 10:18、ピリピ 2:8）、この職務を遂行するために律法のもとに生まれ（ガラテヤ 4:4）、律法を完全に成就されました（マタイ 3:15, 5:17）。彼はご自分の霊魂において、最も激しい苦しみに耐え（マタイ 26:37, 38、ルカ 22:44、マタイ 27:46）、その肉体において最も苦しみと痛みに耐え（マタイ 26 章、27 章）、十字架にかけられて死に（ピリピ 2:8）、葬られ死の権威のもとに留められたが、その体は朽ち果てませんでした。受難された体で再びよみがえられ（ヨハネ 20:25, 27）、天に上り、御父の右に着座し（マルコ 16:19）執り成しておられます（ロマ 8:34、ヘブル 9:24, 7:25）。そして、世の終わりに人間と天使を審判するために、再び来られます（ロマ 14:9, 10、使徒 1:11, 10:42、マタイ 13:40－42、ユダ 6、Ⅱペテロ 2:4）。

８．5. 主イエスは全き従順をもって、永遠なる聖霊を通して、神にただ一度ご自身を犠牲の捧げものとし、父の公義を十分に満足させたことで（ロマ 5:19、ヘブル 9:14, 16, 10:14、エペソ 5:2、ロマ 3:25, 26）、御父が彼に与えたすべての者たちのために、神との和解だけでなく、神の国での永遠の相続を、値を支払って買われました（ダニエル 9:24, 26、コロサイ 1:19, 20、エペソ 1:11, 14、ヨハネ 17:2、ヘブル 9:12, 15）。

4 項では、イエス・キリストが仲介職を快く受け入れたことを叙述することで、それが父の御心であったことを強調します。前に言及した贖い契約の内容が、もう一度反復されます。4 項では、キリストの贖いの御業を具体的に叙述し、5 項では贖いの御業の効果を説明します。それゆえ、キリストの贖いの御業は神の公義を満足させたことなので、キリストの功労がその民に転嫁されるのです

4 項と 5 項の説明の中で、清教徒時代から今日まで、キリストの贖いの働きとその効力について信じない誤り等があります。先ず、4 項は、ソッツィーニ主義に対して論駁している叙述です。ソッツィーニ主義者は、キリストの苦難がその国民の刑罰を背負われたことを否定します。そして 5 項での「御父が彼に与えたすべての者たちのため」と叙述することで、限定的贖罪を信じないアルミニウス主義が誤りだというのを明らかにしています。また、ソッツィーニ主義に対して論駁しているのです。

ウェスレーの教えは、4 項と 5 項の内容と衝突します。彼は義認を説明する時、罪の赦しだけを話し、義の転嫁を含めなかったのです。なぜなら、義となれたなら、聖化を排除すると考えたからです。それで、義認以降に自分の行いがあってこそ、最終的に義となれると話したからです。このようにウェスレーは、義の転嫁教理を信じていなくて、自分の行いがあってこそ義となれると話したからです。21 世紀にも、この項目等に反対する神学もありました。ニコラス・トーマス・ライト（N.T.Wright）のパウロの新しい視点（New Perspective on Paul）です。ライトは、信じることの内容を受け入れることで教会の会員となれて、救われ、その次に教会で律法を守ってこそ最終的に義と認められると主張します。[90]

---

90 トーマス・ライトは、自分の神学の正統性を強調するために、ルターの信仰義認教理が間違っていると主張します。

ウェスレー神学と同じ構造です。勿論、本人自身はカルヴァン主義だと主張していますが、非理論的です。二つの神学共にキリストの義の転嫁を否定することです。このような神学は、現在福音主義陣営の中でも簡単に発見することができます。このような間違った誤りが教会で流行っている理由は、自分たちの行いによっては義と認められないという霊的体験がないからです。一方で、自分たちの行いが神の御言葉の基準からして、とんでもなく不足していることを悟れていないからです。

８.6. **贖いの御業は、キリストの聖受肉以前には、キリストによって実際的に成就されなかったと言っても、その働きの力と効力と有益は世の初めから引き続き、すべての世代に渡って選ばれた者たちに適用されました。キリストは、約束と模型と犠牲の捧げによって伝達されていて、女の子孫が蛇の頭を打ち砕くという、世の初めから殺される小羊として強調され、適用されていました。彼は昨日も今日も永遠に同一な方です（ガラテヤ 4:4,5、創 3:15、黙 13:8、ヘブル 13:8）。**

約の信者も新約時代の信者も同じように、キリストの犠牲の功労によって救われました。選ばれた国民に、キリストの働きの有益などが伝達されました。キリストの死の効力は常に同じです。更に本項では、創世記 3 章 15 節を恵み契約として見ています。そして、ウィリアム・パーキンスは、イエスが聖霊に導かれて悪魔に試みを受けられたことを、この聖句の成就として見ました。[91]

91　Willian Parkins, *the Combar betiween Christ and the Devil Displayed*参照。

8. 7. キリストは、仲保の御業において二つの本性に従って行われます。各本性は、本性自体に属することを行われます（ヘブル 9:14、Ｉペテロ 3:18）。しかし、キリストの人格の統一性のゆえに、本来一つの本性に属していることが、聖書では時々、他の本性によって支配されている人格に思われます（使徒 20:28、ヨハネ 3:13、Ｉヨハネ 3:16）。

キリストは、二つの本性に従って働かれる仲保者だと叙述することによって、人性だけで仲保者の任務を遂行するというローマカトリック教会の教えに論駁しています。キリストの仲保の働きは、キリストの人格の中で成し遂げられた二つの本性の交流によって決定されます。

8. 8. キリストは対価を支払って贖われたすべての人々に、キリストはそれを確実に効果的に贖いを適用させ、伝達させます（ヨハネ 6:37, 39，10:15, 16）。彼らのために執り成しを（Ｉヨハネ 2:1, 2、ロマ 8:34）、救いの奥義を、御言葉において、そして御言葉を通して啓示なさり（ヨハネ 15:13, 15、エペソ 1:7－9、ヨハネ 17:6）、その聖霊によって信じ従うように有効に彼らを説得し、御言葉と聖霊によって彼らの心を治め（ヨハネ 14:６、ヘブル 12:2、Ⅱコリント 4:13、ロマ 8:9, 14, 15:18, 19、ヨハネ 17:17）、その全能の力と知恵によって彼らの敵を打ち砕き、彼の不思議な計り知れない計画の実行を、最も相応しい方法で成し遂げられます（詩 110:1、Ｉコリント 15:25，26、マラキ 4:2, 3、コロサイ 2:15）。

本項では、キリストが過去の歴史の中で、私たちの贖いのために成就なさったことを、今日私たちの生活の中で適用なさることを叙述しています。特に「適用」と「伝達」という単語を用いています。つまり、キリストが贖いの恵みを適用させ伝達させ、実際に救いが起こるように働かれます。キリストは、神の

御言葉によって救いの神秘を私たちに啓示なさいます。キリストは、聖霊によって私たちの内に御業を行われます。キリストは、聖霊によってご自分のなさる働きを効果的にさせます。キリストは、聖霊の力によって私たちの心を統治なさいます。

本項の叙述は、アルミニウス主義が誤りであることを明示しています。アルミニウス主義者は、キリストの死によって、救いの可能性だけをすべての人に提供すると主張し、聖霊の有効な御業は否定します。そのため本項では、贖われたすべての者たちにキリストが確実に有効に贖いを適用させ伝達させておられると説明し、キリストの預言者職務である救いの奥義を啓示なさり、御言葉と聖霊によって彼らの心を主管、あるいは、新しい被造物として造られることを強調しています。このようなウェストミンスター信仰告白書の叙述と、今日現代福音主義教会とを比べてみると、現代福音主義はアルミニウス主義に一層偏っていて、同じように普遍主義救済論を主張しているのが分かります。[92]

92　代表的著書として、The Grace of God, the Will of Man, A Case for Arminianism(Grand Rapids, Zondervan, 1989)を挙げることができます。この書は、現代アルミニウス主義者たちであるClark Pinnock、Howard Marshall, Grant Osborne等が投稿しました。